

日蓮聖人の戒壇義に見合う葬儀式

服部 即明

日蓮聖人の三つの法門の第二は「本門の戒壇」であるが、不肖即明の言う戒壇とは「入マンダラ義」である。葬儀とは、この、死後の入マンダラ儀式であると思う。

生前に「入マンダラ」を達成した人はごくまれであろう。

入マンダラ儀は一度達成すれば、その状態が永続するというものではなく、常に意識していなければ、持続できない性質のものである。それゆえに一般在俗者にとっては、難しいことと言えよう。朝夕仏前で誓いを新たにする習慣を堅持している人はごく少数であろう。仏前で勤行を日課にしている人でも、市販の御経本に依って勤行はしても、自己の信念を盛り込んだ勤行をしている人は滅多にいないと思われる。まして私が主張する「入マンダラ」は一般の方々には広く認知されていないと思われる。おそらく一人もいないのではなからうか。教師の方々の中にも希なのではないかと思われる。いまだに「戒壇」を建造物と思っている人も多いような気がする。自覚の問題であり、地涌のボサツの必須条件であるという教義を聞いたこともない。教義の不毛は救いがたい。今は教化学に期待すべき時である。そういう意味で「戒壇」イコール「入マンダラ」説から葬儀式の要諦を述べてみたい。

葬儀の目的は、第一には、死者の弔いである。後に残った近親者が故人をあの世へ送る儀式である。宗教や宗派によつて多少の違いはあつても、死者をあの世へ送る儀式にはちがいない。わが日蓮宗では、古来、冠りマンダラといつて、大マンダラを頭部にかぶせて引導を与えるのが習慣になっている。何時ごろからのことか知らないが、素晴ら

しいことではなかるうか。しかしどういう意味であろうか。ただたんに通行手形として持たせるように思われているとしたら、せっかくの習慣が価値のうすいものになってしまおうと思われる。

さればこそ、葬儀式において、戒壇義を厳修する必要があるのである。日蓮門下は、自己を投げうち、いつでも他のために命を投げ出すボサツでなければならぬ。しかし、これは生易しいことではない。だれかが命の危機に遭遇したとき、とっさに身を投げ出すことはよくある。それが普通の世の中になると良いと思う。それがベースになって政治も経済も回転していくと良いと思う。そのような、他の為に自己を犠牲にすることをいとわぬ行動はボサツの特性の一つであるが、理性が関与していない場合は本物とは言えないかもしれない。そこに理性の関与があつて始めて本物の自己犠牲と言えるのかもしれない。その人の人格そのものが自己犠牲的でなければならぬ。そのような人をボサツというのである。はたして何人いるのであろう。数えるほどしかないのではないだろうか。しかし、妙法蓮華経従地涌出品には、六万恒河沙というすごい数の、他の為に立ちはたらく本化のボサツが涌出している。日蓮門下はその一人にならなければならない。

被りマンダラ

古来、日蓮宗の葬儀には死者の顔面に大マンダラをかぶせて送る風習がある。これこそ入マンダラの強要である。死者となったからには、日蓮聖人の教えを守ってボサツになってくださいよというわけである。しかし、入マンダラは何を意味していたのか。単なる通行手形だったかもしれない。

入マンダラの意義を知っていたか。形としては完璧であると思われたが、その中味は合格だったのであろうか。いささか気になる。ただ単に通行手形としてのマンダラであったのかも知れない。それでは「戒壇義」としての意味をなさない。形が似ていても、意味が全然違う場合も多い。

「本門の戒壇」とは「本門の本尊」である大マンダラの中に六万恒河沙のボサツの一人として列座することであり、これが日蓮聖人の「本門の戒壇」という法門なのである。日蓮門下は常に世間をリードしなければならぬ。法華のボサツなのだから。

「入マンダラ」といって、どこへ入れてもらえばいいのという声が聞こえてきますね。それは日蓮聖人の御名花押の次に入れて貰ったかどうかでしょう。そういう気概を持った人がどんどん現れないと世の中が良くならないでしょう。「本門の戒壇」というのはそういうことだったのでないでしょうか。

宮沢賢治さんは、最後の秀作「銀河鉄道の夜」を書き法華のボサツ等を数限り無い六万恒河沙という無限に近い数のボサツたちが大地から湧き出したのです。そのボサツを普通の宝樹下の宝座の着座は数が多すぎて困難ですからキラキラと光りかがやく銀河なら場所も数も不足はないということで銀河をボサツの宝座に選ばれました。まことに賢治さんらしいすばらしい発想だったと思います。こうして賢治さんによって、大マンダラは宇宙大に拡大され、入マンダラが一般庶民のものとなりました。今や日蓮聖人の大マンダラは、賢治さんのお陰で宇宙大になり、ボサツの意味も自己犠牲に代りかけているように思われます。しかし、法華のボサツは本化のボサツでなければなりません。

本化のボサツになること。ただたんなるボサツと本化のボサツとは大変な違いがあります。大マンダラに入れてもらうには本化のボサツにならなければなりません。

本化のボサツは、法華経の涌出品第十五に登場する六万恒河沙（無数）のボサツたちで、釈尊の大昔からの弟子（本弟子）で（釈尊の世に出られた目的を知り尽くしたボサツたち）が登場します。法華のボサツはそういう特別な任務を自覚して行動しなければなりません。

つまり、地球上を平和な浄土にする任務を背負っているのです。ですから亡くなった人にも、そういうボサツになつてもらおう儀式をするのです。

導師・副導師・式衆・枕経・火葬経・七日七日のお経・尽七日忌・一周忌・三回忌・年忌等。通夜説教は元より、法要には必ず法話をし、根本的な信仰、殊に日蓮聖人の本門の思想を易しく、懇切丁寧に解説しなければならない。葬儀式がもとになるから、費用は、世間の相場より外れないように適正な金額を提示しなければならない。常識が問われる。

寺院も普通は百年くらいで建て替えなければならぬから資金を積み立てるべきであろう。その経費を積み立てるべきである。その都度寄付を集めることは止めるべきである。祇堂金積み立て制にすると良いと思う。総代管理にして住職が飲んでしまわないことが重要である。寺の寄付集めは止める時代ではなからうか。住職と総代がよく相談して計画するべきであろう。

お寺のお金集めは葬儀の際に限定するとういと思う。施主は故人の為に供養になると思うし、惜しみなく出しやすいように思われる。故人をしのぶ気持ちには尊い物であるから大いに尊重したいものである。

法名（戒名）に居士大姉を望む人があるが信仰上の功績を加味して付けることを理解させたい。

最近直葬といつて儀式をせずただ遺骨化するだけの葬儀が増えてきたと言います。これは精神の荒廃を意味します。ことはそれでも済むかもしれませんが、精神の荒廃はどうなるのでしょうか。これは行方不明の増加と共に生命の軽視としか思われません。動物たちの死と変わりません。人の尊厳が問題です。

今や人も動物も差別が無くなつてしまいました。人間性を取り戻す為にも葬儀が大切だと思います。宗教者の責任は重大だと思われます。